

1975年の遊園地事情

——文化社会的考察——

上 田 裕

はじめに

関西には、阪神、阪急、近鉄、京阪、南海の五大私鉄があり、それぞれ「阪神パーク」、「宝塚ファミリーランド」、「あやめ池遊園地」、「ひらかたパーク」、「みさき公園」という遊園地を沿線に設けていた。現在では、「阪神パーク」が2003年3月、「宝塚ファミリーランド」が2003年4月、「あやめ池遊園地」が2004年6月に閉園してしまった。現役で活躍しているのは、「ひらパー」（「ひらかたパーク」）と「みさき公園」だけである。また各電鉄はその路線に応じて、上記以外に、「狭山遊園地」（南海高野線）、「玉手山遊園地」（近鉄南大阪線）なども設けていたが、それぞれ2000年、2001年に閉園してその姿は見るができない。

こういった電鉄系の遊園地も最盛期の時期があった。1975年頃である。入場者数が、「阪神パーク」は1973年には130万人を超え、1975年には、「宝塚ファミリーランド」も「ベルバラ」の勢いもあって400万人を超え、1975年には、「あやめ池遊園地」にしても120万人を超え、遊園地はピークを思わせる盛況振りを示していた¹⁾。

このような遊園地情勢のなかで、当時学生であった私は、田村紀雄先生の指導の元で、先に述べた五大私鉄遊園地の調査を行った。未熟な学生たちがその勢いでやり遂げた調査だったが、今思えば、よくぞやった、という調査だった。入り口で入園者を、一応無作為で選び、その調査対象を気づかれないように尾行して、いつ・どこで・何をしたかを、分単位で記述していき、出口のところでアンケートの質問をして回答してもらうというものであった。一人の調査委員で1日に1～3程度の調査しかできなかったが、各遊園地で20程度で最終的には合計100程の標本数を集めた。このデータの分析は、当時はパンチカードに穴をあけてデータを転記しソーターで集計するという手間のかかる作業をやった。

今回このデータを再分析することで、当時の遊園地での過ごし方を考察してみたい。特に、遊園地での過ごし方を調査員が事細かに描いているメモの部分と、回遊経路の部分に注目しながら当時の人々の遊園地での楽しみ方を描いてみたい。

そうすることで、東京ディズニーランドの1983年開園に向けて着々とその計画が進められていた1975年という時期がもつ意味を考察してみたい。そして、当時の遊園地がどのよ

うな在り方をしていたか、それにともない人々の遊園地での過ごし方にどのような特徴や変化の兆しがあったのか、1975年の遊園地事情を探ることで、遊園地からテーマパークへと展開していく娯楽のあり方とその社会的背景を提示できたらと思う。

1. 1975年の遊園地調査の概要

関西五大私鉄の代表的遊園地である宝塚ファミリーパーク（阪急）、あやめ池遊園地（近鉄）、枚方パーク（京阪）、みさき公園（南海）、阪神パーク（阪神）の5箇所を、1975年の6月に、桃山学院大学社会学部田村紀雄ゼミの4回生合計27名が、遊園地ごとに4～6名の班に分かれて調査を行った²⁾。

調査標本数は、各遊園地で20標本、合計100を目標に、来園者の多い土日を中心に2・3日の調査日を設け、実施した。実際にはこの目標数の100以上を集めることができた。

この調査は尾行調査であり、来園者が園内でどのような施設をどのような順序で利用し、どのような楽しみ方をするのか、そしてその来園者がどのような人たちだったかを調べるものであった。調査者は、開園時刻の9時ころに、遊園地の入り口で待ち構え、調査対象を一応無作為で選び、尾行が開始される。来園者の園内での行動を分単位で記録していき、最後の出口のところで調査の趣旨と素性を明らかにし、フェイスシートや動機、満足度などの質問を行い調査員がその回答を記録するというものであった。5時間以上滞在する来園者も5人ほどいて、長時間気づかれることなく見失わないように絶えず目を離さなさを尾行することの辛さや、後を付けていることのうしろめたさが、今でも思い起こされる。どの調査者も同じ思いだったらしく、そのことは調査票の感想欄にたいへんだったという思いが書き綴られている。

この調査をゼミでやることになったのは、当時、田村先生が「遊園地学」³⁾を提唱しておられて、ゼミでこの「遊園地学」なるものをつくりあげよう、ということで始まった。田村先生が唱えておられた「遊園地学」がどのようなコンテキストを設定していたかという（田村紀雄、1975、121頁）、①「都市化の中での大衆文化や民衆娯楽の変化とその演出者と演技者（消費者）」、②「メディアとしての遊園地の働き」、③遊園地での「人々の行動パターン」、④「遊園地の変遷や催物といった生態学的アプローチ」、⑤遊園地に対する「地域社会住民の反応はどうか」、といったものがあつた。当時の私は、それほど面白いとは思えない遊園地にどうしてこんなに人々が集まるのだろうか、という素朴な疑問をもちながら調査に参加した。ゼミとしてはこのような「遊園地学」の問題意識から遊園地を調査しようということになり、遊園地での来園者の行動パターン特に回遊行動にはどのような特徴があるのか、そして各遊園地にはどのような特徴があるのか、そして来園者のライフスタイル（住居が一戸建てかどうか、庭付きかどうかなど）と行動パターンとの間にどのような関連があるのかを調べることになった（田村紀雄、1975、121頁）。

調査の準備は、5月の下旬頃から、各遊園地の調査班長が遊園地側の担当責任者と数回連絡をとりながら、6月の初旬に各班ごとに調査者全員が集まり、遊園地の担当責任者から遊園地の現状や、その取り組みなどを聞く機会を一回以上もち、各自が問題意識を共有できるように、進めていった。そして6月の7日から29日にかけて、各遊園地で2日から3日ほど調査を行った。その調査の概要、調査地と調査日、調査担当者数、標本数は表-1のとおりである。

表-1 調査の概要

調査地	電鉄	調査日	入場者数*	調査員数	標本数：100
宝塚ファミリーパーク (兵庫県)	阪急	6月15日(日)：晴		6名	19(-2)**
		16日(月)：晴			
あやめ池遊園地 (奈良県)	近鉄	6月7日(土)：曇	388人	6名	25(-1) 無回答：2
		8日(日)：晴	3,741人		
		9日(月)：晴	337人		
枚方パーク (大阪府)	京阪	6月18日(水)：曇後雨	70(PM 3:00現在)人	4名	25(-2) 尾行記録無：2
		21日(土)：曇	400人		
みさき公園 (大阪府)	南海	6月1日(日)：晴		5名	16(-1)
		8日(日)：晴			
阪神パーク (兵庫県)	阪神	6月15日(日)：晴		6名	15
		29日(日)：晴			

* : 入場者数は遊園地の当時の担当責任者からの聞き取りから得られたデータ

** : () 内は当時の報告書 (1976年) に記録されている標本数から不足している数

2. 調査結果からみる遊園地での楽しみ方

標本数は、当時の報告書には104集めたとあるが、どのような手違いがあったのかわからないが、手元にはちょうど100標本しかない。この100標本を基に、ここでは現在の私の関心からデータを集計し考察してみたい。当時の遊園地にどのような人たちが、どのような目的でやって来て、どのような楽しみ方をして過ごしたのか、そして当時の遊園地は内容的にどのような特徴があったのか、ということに焦点をあてながら考察を進めて行きたい。

来園者の年齢構成は、最低年齢が12歳で最高年齢が73歳、平均年齢は28.6歳であった。比較的10代から30代までの若い年齢層が多い傾向が見られるが(表-2)。そして来園者のほとんどが家族連れ(配偶者、子ども、きょうだい、祖父母、孫のいずれかの組み合わせ)で60%以上を占めていた。私たちはいくら無作為に調査対象を選んだといっても、当時の未熟な学生にとってはできるだけ、アンケートに答えてくれそうな若い人や家族連れを選んでいたように思えるので、その結果このような傾向を強める結果になったかもしれない。

表-2 五大私鉄遊園地と年層

	何 歳 代 ？							合計
	10歳代	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代 以上	NA	
五大私鉄遊園地 宝塚ファミ リーランド	8	6	5	0	0	1	0	20
あやめ池	6	6	7	2	1	2	1	25
枚方パーク	4	8	11	1	0	0	0	24
みさき公園	2	3	8	3	0	0	0	16
阪神パーク	3	7	3	0	0	1	1	15
合 計	23	30	34	6	1	4	2	100

来園者のほとんどは、各遊園地とも居住区域から一時間以内で来られる同一府県内または隣接府県が多くなっている（表-3）。これらの遊園地は郊外型遊園地といわれ私鉄沿線の開発とともに誕生してきたものである。都心部に居住している人たちにとっても、郊外に居住している人たちにとっても、約1時間ほどで施設を利用できるようになっていたといえそうである。

表-3 五大私鉄遊園地と居住地域

	どの地域から来たか				合計
	同一府県から	隣接府県から	他の圏域の府県から	NA	
五大私鉄遊園地 宝塚ファミ リーランド	12	6	2	0	20
あやめ池	10	13	0	2	25
枚方パーク	14	7	0	3	24
みさき公園	7	9	0	0	16
阪神パーク	10	4	1	0	15
合 計	53	39	3	5	100

実際に来園動機をみても、「家に近い」というのが26%で一番多くなっている。「子どものため」が18%で2番目となっている。また同じ位置に、「その他で、他にいくところが無い、デートなど」があるが、遊園地そのものではなくほかに理由があって遊園地へ行くというものである。結局、最も手軽に子どもを遊ばせることができる場所として遊園地があったといえそうである。都会の喧騒から離れて「自然の中でくつろぎたい」というのも10%で4番目になっているのは郊外型の特徴を示しているのだろう。さらに注目したいのは、現在では中心的な動機になっている「乗物に乗りたい」が極めて少ない点である。しかしこの3人（%）の人たちは10代2名と20代1名であり、たとえ少数であっても乗物が若者たちにとって動機付けになっていることは、75年以降のテーマパークへの展開が予測され興味深いことである。

表-4 五大私鉄遊園地と来園動機

	来園動機：園自体に対して											N	A	合計
	乗り物（ジェットコースターなど）に乗りたくない	イベント	観劇	自然の中でくつろぎたい	会社や団体のつきあい	家・宿泊地に近い	低料金	子どものため	入場券を持っている	自分や家族が楽しみたい	人がいる			
五大私鉄遊園地 宝塚ファミリーランド	0	0	1	2	1	5	0	4	1	4	2	0	20	
あやめ池	2	0	0	1	1	11	2	3	0	0	3	2	25	
枚方パーク	1	1	0	2	0	1	0	5	1	0	10	3	24	
みさき公園	0	0	0	3	0	4	0	3	1	2	2	1	16	
阪神パーク	0	0	0	2	0	5	1	3	0	2	1	1	15	
合計	3	1	1	10	2	26	3	18	3	8	18	7	100	

図-1 あやめ池遊園地



当時の遊園地はどのような内容をもっていたのだろうか。図-1の当時の「あやめ池遊園地」のパンフレット⁴⁾の写真をみると、どの遊園地にも一応あると思われる娯楽施設が描かれている。左上から、ラウンド・アップ、動植物園、トッパンド、観覧車、ジェット・コースターと池、メリーゴーラウンド、ボート、ラッシングカーなどである。遊園地にある娯楽施設やアトラクションを整理すると、表-5のようになるだろう。

表-5 遊園地の娯楽施設

1. 絶叫系乗り物：ジェット・コースター、ラッシングカー、ウォーターシュート
2. 子ども・ファミリー向け乗り物：ボート、観覧車、メリーゴーラウンド
3. ゲーム施設：射撃場、コイン・ゲーム
4. 自然（動植物）観賞用施設：動物園、植物園、池、川、海、噴水
5. 展示・アトラクション施設：歌劇、お化け屋敷、菊人形、イベント企画
6. 買い物施設：売店、自動販売機
7. 休憩施設：ベンチ、休憩所
8. 食事施設：レストラン、喫茶店、フードコート
9. 入り口：モニュメント、門、噴水

表-6 五大私鉄遊園地と満足の理由

	満 足 の 理 由									N	A	合 計	
	絶叫系乗り物が良かった	子どもが喜んだ	子ども向け乗り物などが良く、動物園や自然環境が良かった	(歌劇)が良い 展示・アトラクション施設	休む施設などが整い、くつろげた	良かった	交通の便や設備などが便利で良かった	広々としている…人が少ない	めっている				その他…こんなもの、あきら
五大私鉄遊園地													
宝塚ファミリーランド	3	3	0	3	0	1	8	2	0	0	20		
あやめ池	5	3	2	1	3	0	2	1	4	4	25		
枚方パーク	0	2	1	0	0	0	3	0	13	5	24		
みさき公園	0	1	4	0	0	0	2	4	5	0	16		
阪神パーク	0	3	0	0	1	0	1	1	4	5	15		
合 計	8	12	7	4	4	1	16	8	26	14	100		

実際にどのような施設でどのように楽しんだのであろうか。来園の動機としては、子どもを遊ばせ、自分自身も自然のなかでくつろぐには、他に適切な場所が無いので、居住地から近いこともあって来たというものであった。この動機が満たされたかどうかについて満足理由の結果（表-6）をみてみると、「子どもが喜んだ」が12%、「広々としている」が16%、「自然環境が良い」が7%ということから、当初の目的はおおよそ達成されたといえるだろう。

これはリピーター率が約 80% で 2 回目以上の来園者が多いという結果からもいえるだろう。しかし当初の動機に対しては確かに満たされたかもしれないが、「施設や企画の不十分さ」や「料金の高さ」などがあって、遊園地に来た結果として満足して帰れたかというところではなさそうである。「満足せず」が 26%、「その他：あきらめている」が 8%、「NA」が 14% で、合計 48% となり、約半数が満たされず帰ったといえるだろう。これは平均滞留時間が 2 時間 6 分と短いことからわかる。園内に最も長く居た人で 5 時間 47 分、最も短い人にいたっては、わずか 12 分しかなくただ通り抜けただけで何をしに来たのだろうと思える。調査員も「仮面ライダー・アマゾン見たら即出口へ向かった。アーモツイナー」という感想を述べている。東京ディズニー・ランドでの現在の平均滞留時間は 8 時間以上であり、当時の最長時間を簡単に超えてしまっている。

この 2 時間をどのような時間帯で過ごしていたのだろうか (表-7)。午前 10~11 時ころに来園して 2 時間ほど過ごして 13~14 時ころに退園し、そして午後は 13~15 時ころに来園して 15~17 時ころまでに退園するという楽しみ方をしていたことがうかがえる。

表-7 入園時刻と退園時刻

		退 園 時 刻								合計
		~12 時	~13 時	~14 時	~15 時	~16 時	~17 時	17 時以降	NA	
入 園 時 刻	~10 時	5	3	2	1	2	0	0	0	13
	~11 時	6	7	11	3	2	0	0	0	29
	~12 時	0	3	6	5	3	2	2	1	22
	~13 時	0	1	3	7	2	0	0	0	13
	~14 時	0	0	0	1	4	2	1	1	9
	~15 時	0	0	0	0	4	5	1	0	10
	~16 時	0	0	0	0	0	2	1	0	3
	NA	0	0	0	0	0	0	0	1	1
合 計	11	14	22	17	17	11	5	3	100	

以上のようなデータ結果から、どのような来園者たちがどのような楽しみ方をしたのかについて描かれるイメージは、次のようなものであろう。遊園地の近くの一戸建てもしくはマンションなどに居住している 20 代から 30 代の若い世帯の家族連れが、子どもを遊ばせ、自分自身もできれば日頃の都市生活の疲れを癒したいと思ったとき、両方を満たしてくれる場所が近くでは他には無いので、比較的自然の多い遊園地でくつろぐことを選び、やって来た。しかし設備の不十分さや園内の施設利用料金の高さから、長時間滞在することができず、2 時間程度で退園し、十分には満足できずもとのあわただしい生活にあわただしく戻る、という生活パターンを繰り返していた姿が思い浮かぶ。ではなぜこのような過ごし方をするようになったのかを、当時の遊園地のあり方、特に集客装置としての在り方との関係から考えてみたい。

3. 集客装置としての遊園地の在り方

関西五大私鉄の遊園地は、いずれも開園時期は古く、「みさき公園」を除いて明治の末ころ、私鉄沿線に大都市から郊外へと人の流れを逆流させるかのように開園された。いずれも大阪市内から1時間以内の乗車時間で到着する距離である(図-2)。しかし時代の流れの中で、私鉄沿線郊外型の遊園地は次々と姿を消していき、この五つのうちでは、「ひらかたパーク」(「ひらかたパーク」)と「みさき公園」しか残っていない。

広さは、「阪神パーク」のように10haほどの比較的狭いものから、「あやめ池遊園地」のように「東京ディズニーランド」よりも広い50haもあるものもある。

1975年度の入場者数は、他の遊園地が100万前後であるのに対して、「宝塚ファミリーランド」が400万人と最も多い(表-8)。というのも、「宝塚ファミリーランド」は動物園、植物園、遊戯施設、大浴場(ヘルスセンター)、歌劇場の5つのエリアに分かれていて、それぞれをモノレールが連結するかたちをとっていた。そして歌劇場が120万人で大浴場を合わせると200万人に達し、遊園地部分は200万人弱程度だったと思われる。そして「ベルサイユのバラ」が大ヒットし、歌劇場に多くの人たちを呼び込んだためでもある。しかし、実際には平日・土曜・日曜と調査で園内にいた私たちにとって、満員盛況とはとてもいえない状況だった。「あやめ池遊園地」では、調査日の6月7日の土曜で入場者数が388人、9日の月曜で337人、8日の日曜になると約10倍の3741人(表-1)だが、こんなに少ない入場者で経営は大丈夫かな、と感じたものだった。

各遊園地では、季節型になる在り方から脱却して、特にオールシーズンで来園者を呼び込むそれなりの工夫をしていたようだ。「あやめ池遊園地」の場合、表-9のような、季節と季節の間に準備期間を挟み季節に応じた催し物を用意する「年間スケジュール」を組んで、年中何らかの形で集客できるように考えていた。

しかしこの内容は、間に合わせ的でホンモノとはいいがたい代物に思えた。各鉄道会社が、本業として力を入れて、遊園地経営に取り組んでいたとは思えない。「あやめ池遊園地」は近鉄興業が経営していたが、社員の20%が本社からの出向であった。また、「ひらかたパーク」では、遊園地内の施設のほとんどが業者委託で、直営が6箇所しかなかったそうである。

図-2 五大私鉄の遊園地の位置



表-8 五大私鉄遊園地の概略

	開園時期	広さ	年間入場者数
阪神パーク	明治38年～平成15年3月(閉園)	10.3 ha	
宝塚ファミリーランド	明治41年～平成15年4月(閉園)	16 ha	約400万人：1日平均1万人、多いときで8万人
ひらかたパーク	明治44年	15.5 ha	
あやめ池遊園地	大正15年～平成16年6月閉園	50 ha	約100～110万人(催し物のあるときは、日曜・祝日で2～3万人、平日で3～4千人)
みさき公園	昭和32年	45 ha	約80万人

遊園地が力を入れていた乗り物でも、ジェットコースターが1億5千万円、アストロファイターが8千万円かかることを考えると、自前で用意することはかなりの負担になったと思える。

当時の収益源は、「あやめ池遊園地」の場合だと、入場料、遊戯施設利用料金、食堂・売店の売上げが各3分の1ずつだったようだ。これは他の遊園地でもそれほどの差はなさそうである。そのころの大卒初任給が8万円程度の時代に、入場料が500円(あやめ池)から650円(みさき公園)ほどで、しかもお化け屋敷などで90円、ジェットコースターで150円の遊戯施設利用料がプラスされ、利用時間がわずかに2～5分程度となると、2時間ほど楽しめる映画館の料金がこの年値上げされて1000円だったことを考えると、遊園地で遊ぶことの割高感はぬぐえない。遊園地で使った総費用の平均は2800円という調査結果だった。ほとんどの客は2・3人の連れで来ていることを考えると、2時間半(平均滞留時間)楽しむのに1人あたり1000円以上は使いたくないということだろう。現在の価値に置き換えると、単純に給料を比較して計算すると2時間半で2500円ということになり、「東京ディズニーランド」の滞留時間が8時間以上だとすると約8000円の価値があることになる。現在の入園料が5500円であることを考

えると「東京ディズニーリゾート」で年間2500万人の入場者があるのもうなずけるところである。

家族連れで出かけるには割高だし、結果的にも十分満足できないにもかかわらず、「遊園地最盛期」と思わせるほど、なぜ遊園地にこぞって出かけることになったのだろうか。

表-9 催し物の年間スケジュール

季節	時期	内容
冬	11月～翌2月	スケート
	2週間	準備期間
春	3月～5月	催し物
	2週間	準備期間
夏	6月～8月	プール、お茶会(6月15日[日]～)
	2週間	準備期間
秋	9月～10月	催し物、菊人形

おわりに

ここでは、これまで考察してきた当時の遊園地の在り方とそこで過ごす来園者の過ごし方の特徴から読み取れる事柄を、さらなる検証を必要とする課題として提示しておきたい。

まず遊園地は、大人つまり親や祖父母が子どもや孫を遊ばせる場所であり、大人も子どもも共に遊園地で楽しむという過ごし方ではなかったということがある。尾行調査での行動軌跡の記録にこれをうかがわせる記述がある。父親と子どもの場合、子どもは乗物やゲームをしているが、父親は競馬新聞をもちながらラジオを聴いている、というものがいくつかある。子どもが遊ぶ場所であるにもかかわらず、子どもの遊びたい気持ちを無視して、両親とも子どもをほったらかしてゲーム・コーナーで遊んでいるとか、子どもを遊ばせずに自分が遊ぶことに夢中になっている母親もいた。大人にとって遊園地は、自分たちが楽しむことを犠牲にするか、自分たちだけが楽しんで子どもを遊ばせないかの選択をしなければならない場所であり、あまり長居はしたくないだったといえそうである。もちろん大人も子ども同じ乗物やアトラクションを共に楽しむ必要はないが、楽しさを共有するかたちをとっていなかったといえるだろう。しかし子どもが遊ぶ姿をカメラにおさめる親たちが登場したことで、このような役割分担も遊園地などでの楽しさを共有するひとつの在り方になることを示している。いずれにしてもこの時代は、子どもは親の管理のもとで遊ばせてもらうかたちをとっていたのであり、まだ子どもが消費主体として自分で自分の楽しさを選択できる立場になかったといえる。

遊園地は親が子どもを遊ばせる場所である以上、それは健全でなければならなかった、ということがある。これは日本の遊園地の特徴でもある。19世紀後半に造られたイギリスのKursaal [South-end] (Crove, 2003) や Dreamland [Margate] (Evans, 2003) やアメリカのConey Island [New York] (Samuelson, 2001) の遊園地は、都市部の労働者階級を対象に、大都市近郊あるいは辺境地域のいささか「いかがわしい」場所にあつて、胡散臭さがある娯楽として存在していた⁵⁾。日本では、このような「いかがわしさ」は、縁日などでの仮設興行で行なわれた見世物小屋で見られたものだが、「宝塚ファミリーパーク」が宝塚温泉に併設されたように、多くの遊園地が温泉地などの歓楽街とともにあつたことを考えると、多少は欧米と同じことが言える。欧米では中小の地元の企業が、法の目をかいくぐりながら、地域行政や住民を巻き込み遊園地経営を展開していったのに対して、日本では大手の鉄道資本が遊園地経営をやったという点でそのような差異が出てきたように思える。欧米とは違って、遊園地の経営に地域社会があまり関わらなかったという点で、遊園地の存亡や研究において日本が遅れている理由になっているようにも思える。

また遊園地は、人工的に造られた複製つまり「コピー」を楽しむ場所でもあつた。ジェッ

トコースターなどの絶叫マシンは安全を保障された「コピー」の「怖さ」を楽しませるものだし、自然を模した庭園や動植物園も同様であろう。しかし「コピー」は所詮「ホンモノ」には勝てない。「動物園ゆうたかて何にも無いやんけ！」という当時の来園者のセリフにあるように、「ホンモノ」の動物園には勝てないのである。「阪神パーク」にいたライオンと豹の人工的交配種である「レオポン」は本来の遊園地の姿にふさわしい「ホンモノ」としての「コピー」だったのだろうが、一度チラッと見ただけで通り過ぎていく来園者の姿が多くあった。

この「レオポン」ではその「ホンモノ」としての「コピー」の面白さを遊園地側がディズニールランドのように演出できなかつたのに対して、「富士急ハイランド」などにあるようなジェットコースターなどの絶叫マシンは、乗っている人たちの叫び声や、降りてきた後のほっとした表情とともにある楽しさを見せることで、私たちの生活場面で体験する「怖さ」とは違う「ホンモノとしてのコピー」の「怖さ」を楽しむ演出ができています。それゆえ今でもその人気は衰えることが無い。

この「マシン（機械）」が楽しさを提供するという、遊園地のあり方は別の意味もある。機械はどの人に対しても同じ楽しさ、つまり「標準化された均質の楽しさ」を提供するということである。ウォルト・ディズニーは、生き物がゲストに対して均質な楽しさを提供できない点を嫌い、「オートラマ」にあるような機械人形による楽しさ提供を好んだといわれている（加賀美俊夫，2003，246頁）。アメリカでディズニールランドと同じ年の1955年にオープンしたマクドナルドなどのファーストフードが標準化された味・価格・手続きを提供したように、あらゆるものが均質化・標準化されてくる時代にあつては、楽しさを提供する娯楽においても、これは当然の結果かもしれない。こういう意味では、当時の遊園地はまだまだ均質化・標準化された楽しさを提供する娯楽としては未成熟だったのかもしれない。日本では、1983年の「東京ディズニールランド」の登場を待つまで実現できなかったようだ。しかし娯楽には何らかの「いかがわしさ」が伴ってこそ楽しいものだとすると、ディズニールランドの均質化・標準化された、しかも管理され無菌化された健全な娯楽の在りようがこのまま続いていくだろうか。これから先の展開が楽しみである。

注

- 1) この当時は遊園地業界もかなり力を入れていたようで、在阪五社社内報研究会の共同企画で各園長が集まり「在阪五社遊園地園長座談会（1974年10月）」（『南海人』，南海電鉄，1975年，24～29頁）を開催されたが、そのときの司会を務められたのが田村先生だった。
- 2) 調査結果は、来園者のフェイスシート（性別などの属性項目）やライフスタイル（一戸建てかどうか、庭付きかどうか、など）や遊園地での過ごし方の単純集計や簡単なクロス集計については、当時の報告書（ST. ANDREW'S UNIVERSITY TAMURA SEMINAR, 1976）で簡単にまとめられている。今回は「SPSS 12.0 J for Windows」のソフトを使って集計した。

1975年の遊園地事情

- 3) 「遊園地学」を唱えたのは田村先生が最初ではないかと思う。現在は、「遊園地学会」なるものも立ち上げようとしている橋爪紳也氏らが「遊園地学」の中心的位置にいるようだ。
- 4) 1975年3月1日から6月1日まで開催された「思い出の50年 目で見ると昭和博」のパンフレットから抜いたものである。
- 5) South-endのKursaalについてはCroveの著書(2003), MargateのDreamlandについてはEvansの著書(2003), アメリカのConey IslandについてはSamuelsonの著書(2001)などにその歴史的経緯などが書かれている。他にも欧米には、その地域の遊園地を個別に研究する研究者や著書が数多く存在する。

参考文献

- 朝日新聞社取材班, 『にっぽん人の余暇』, ダイヤモンド社, 1974年
- Crove, Ken., *Kursaal Memories : A History of South end's Amusement Park*, Skelter Publishing, 2003
- Evans, Nick., *Dreamland Remembered*, Published independently, 2003
- 橋爪紳也, 『日本の遊園地』, 講談社現代新書, 2000年
- 加賀美俊夫, 『海を越える想像力』, 講談社, 2003年
- 中村祥一編, 『現代娯楽の構造』, 文和書房, 1973年
- Oriental Land Co., Ltd. ANNUAL REPORT 2004, p. 2
(http://olc.netir-wsp.com/medias/240977159_Annual2004pdf.pdf)
- Samuelson, Dale., *The American Amusement Park*, MBI Publishing Company, 2001
- ST. ANDREW'S UNIVERSITY TAMURA SEMINAR, 『MOMOYAMA JOURNALISM REVIEW』 Vol. 4, No. 6, 1976
- 田村紀雄, 「遊園地学」, 『経済セミナー』, 日本評論社, 1975年10月, 121頁
- 上田裕, 「遊園地の文化社会学——遊園娯楽の構造と歴史」, 『研究論集』, 第35号, 愛知学泉大学, 2001年
- 上田裕, 「居所としてのテーマパーク」, 現代風俗研究会編. 『現代風俗2003 テリトリー・マシ』, 現代風俗研究会年報第25号, 河出書房新社, 2003年
- 在阪五社遊園地園長座談会(1974年10月), 『南海人』, 南海電鉄, 1975年, 24~29頁